

「底が突き抜けた」時代の歩き方 410

オウムメッセージ - 「この世の救済のためには

悪事さえしなければならぬ」 - について考える

04年2月27日、オウム真理教教祖麻原彰晃（松本智津夫）被告の判決公判が東京地裁で開かれ、地下鉄、松本両サリンや坂本堤弁護士一家殺害など計27人が死亡した13事件で殺人罪などに問われ、死刑判決を言い渡された。96年4月24日の初公判から257回、約7年10ヵ月を要した結果であった。翌28日付朝日の社説は、《中学生のころに尾崎の歌をまねて》詩を作ったことのある、《高校2年で入信した信徒》が、《教祖と会った第一印象について「非常に優しく感じる、一切を拒否しない包容感を感じた」と振り返った。慈悲深い「最終解脱者」に映ったのだ》という個所や、麻原被告が《元々、「真理のためには殺人も許される」という危険な教義を唱えていた》という記述を書きとめているのが、こちらの目に止まる。

もちろん、《教団が社会との共存を求めるのなら、教祖の死刑判決を機に、教祖や仲間が犯した事件をきちんと総括すべきだ》とか、《なぜ事件は起きたのか。なぜ教団がなくなるのか。私たちも考え続けなければならぬ》という常套文句が並べられ、定番のような、《教祖への判決はその一步に過ぎぬ》という締め括りで社説を収めているが、オウム事件に匹敵するような大事件が起こる度に、同じようなことを書くのだろうな、と思わせる文章である。《教祖や仲間が犯した事件をきちんと総括すべき》と、少しも押し迫ってくるような言葉ではないから、また、《私たちも考え続けなければならぬ》となるような、現に社説では《考え続け》ているようにはとても思われぬから、《教祖への判決はその一步に》はなりえないだろう。つまり、事件は何度も繰り返され、この手の社説も何度も繰り返される。

この社説のように我々も考えている振りをしながら、心底考えることがなければ、オウムのような事件はこれからも起こると断言できる。自分の頭で考えることができていたなら、こんな小器用な文章に収まる筈がないのは、自分の頭で考えようとする者にはわかりきっている。同じ紙面に掲載されている宗教人類学者の植島啓司は、《「この世の救済のためには悪事さえしなければならぬ」という松本被告の》、親鸞の『歎異抄』のなかの言葉を連想させるような魅力的なメッセージが、《きまじめな人ほど強く響くことを取り上げながら、次のように戦前の時代背景とダブらせる。

《バブル経済が崩壊し、90年代半ばはリストラや金融機関の統廃合などが本格化し始める。それは金融恐慌、雇用不安、満州事変、5・15事件と、社会不安が増大した昭

和初期に似た時代状況だった。

戦前に日本を支えていた天皇制と国家神道と軍隊という三つの原理は、この国を戦争の道へと駆り立てた元凶とされ、敗戦で否定された。だが、三つはそれぞれ完全に悪いものだったのか。そういう問題意識がずっと私たちの中には潜在していたと思う。

戦後50年。松本被告はシヴァ神の化身だと言って自らを生き神とする一神教を打ち立て、教団の武装化を図った。オウムが殺人に突き進んだのは戦前の日本がたどった道とよく似ている。そして、いま日本がたどろうとする道を取って先取りしていたともいえよう。

だとすると、オウムは、時代の裂け目から化け物のように現れた日本社会の縮図だったのではないか。》

直感と気分を交じえて、《社会不安が増大した昭和初期に似た時代状況》が呼び起こされているが、結局のところ、オウムの事件が惹き起こされるような日本の戦後というもの、戦前の地続きではないかということなのだ。オウムは日本社会の外部での出来事ではなく、まさしく内部の出来事そのものであるから、《時代の裂け目から化け物のように現れた日本社会の縮図》にみえ、戦前の日本の縮小版として殺人にまで突き進んだオウムは、紛れもなく戦後日本のなかで煮詰められて姿を現すに至ったが故に、戦後日本の行動の縮小版として《いま日本がたどろうとする道を取って先取りして》るようみえてくる、ということである。

オウム真理教の信徒に《高学歴エリート、とりわけ自然科学を学んだ青年が多かった》理由についても、説明されている。《合理的な思考に秀でた人ほど逆にその限界も見えやすいということだ。例えば医師は、人々の苦しみに直面する仕事だけに医学の限界も感じやすい。/この世の中はいくら知識を集積しても楽に生きることはできない。そう考えた彼らはもっと分かりやすく人を幸せにする道を探し求めた。》60年代であれば政治運動が彼らのような若者を吸引したであろうが、今はその政治運動に代わる吸引力をもつものは見出されない。オウムは彼らを吸引したというよりも、彼らの渴望の深さに吸引されたのである。《松本被告が修行の手順を示してくれたことも大きい。知識は本で得られるが修行の手順は得られない。様々な修行で生理的な環境を変え、それまでとは違ったものを見せたり、自己の脆弱性に気付かせたりする、これは実は宗教の基本だが、自然科学を学んだ彼らにはそうしたことも新鮮に映ったのだろう。偏差値教育世代には、修行の到達度によって上の位にあがるシステムもうまく機能した。》

別の角度から高学歴エリートとオウムの問題に迫ってみる。彼らの知性はオウムの反知性主義に足をすくわれたということではなかったか。いいかえると、彼らの高学歴はオウムの反知性主義に足をすくわれるような知性ではなかったか、ということだ。つまり、高学歴な者ほど、その知性の対極にある反知性主義が彼らの知性の限界を打ち破る輝きとして映った、ということではなかったか。『アメリカの反知性主義』（リチャード・ホーフスタッター著）の書評が04・1・25付朝日に掲載されており、書評者の東

大教授池上俊一は、《建国当初よりアメリカ社会に広く浸透し、形を変えては何度も頭をもたげた「反知性主義」、すなわち知性への敵視》をテーマとする本書について、こう説明する。

《著者によれば、まず最初にアメリカ人の精神の型を大きく決定づけたのは、「宗教」的な反知性主義だという。君主制や貴族制の下で民衆を搾取する抑圧的なヨーロッパ文明を否定し、文化の存在しない広大な大地に理想郷を築こうとした移住者たちは、純粋な原始キリスト教に一足飛びに回帰する。彼らの福音主義にもとづく平等主義は、貧者の宗教を称揚する一方、学問は胡散臭い聖職者を作るだけだと忌避し、知性に不毛で危険な性格を見る。

「政治」においても、ほどなく反知性主義が主流となる。知性重視は平等主義を無視する差別だとする政治風土では、知識人は政治の指導者になりえなかった。代わりに一般庶民の英知が重んじられ、無学の男、荒野の丈夫が大衆の英雄となって、大統領に選ばれる事態がしばしばおこる。19世紀末から、政治のかかえる問題が複雑になると、専門職や知識人の役割がしだいに高まるが、反知性主義はけっして弱まることはなかったという。》

ここで大統領選を争った頭の良さそうなゴアが敗れ、頭の悪そうなブッシュが、接戦とはいえ、そしてフロリダ州で投票操作疑惑が絡んでいたとはいえ、勝ったことが思い起こされてくる。無知にあふれた、おかしい発言を連発して側近をハラハラさせるような、おバカなブッシュがどうして世界超大国アメリカの大統領に選ばれたりするのか、ずっと疑問であったが、アメリカ社会に根強く巣くっている「反知性主義」がブッシュを押し上げていったということであれば、納得できる。しかし、「反知性主義」に支えられたブッシュが9・11以降、アフガンを空爆し、イラクに侵攻していく「反知性主義」的な決断に踏み切ったことを考えると、いまやアメリカの「反知性主義」は国内にとどまる問題ではなく、国際社会まで覆い尽くしている問題であることに気づく。民主党の今年のケリー大統領候補はアメリカ国民にむかって、世界に対するアメリカの責任を訴えているが、アメリカの「反知性主義」が世界に対する責任を負える普遍性をもたないことははっきりしている。

《もちろん「ビジネス」界にも反知性主義は侵入する。産業化の進展とともに、実業家は知性に敵対する強力で中心的な存在となるが、著者が強調するように、知性とビジネスの対立の裏には奇妙な依存関係、すなわち多くの知識人たちが自分たちの攻撃している実業家一族に養われているという、ぎこちない共生関係がある。

「教育」の分野での反知性主義運動は、1830年代に兆し、1910年代に本格化する。教育といえば、公共の秩序、民主主義、経済の向上に寄与する実学のことであり、実用性に反する知性は無用の長物だった。そこから多くの教育者が、教育不可能ないし劣等者と思われる子供を中等学校の中心におき、能力のある子供たちを周辺部にお

いやる逸脱がおきた。》

「ビジネス」界における反知性主義は、金儲けがビジネスの中心に居座るなら、むしろ知性が邪魔になってくることを考えると、わからないでもないが、知性と直結している筈の「教育」の分野で反知性主義運動が根強いとなると、そこでの教育というものが《公共の秩序、民主主義、経済の向上に寄与する実学》としての調教（＝管理）にほかならず、調教には知性が不必要であることはいうまでもない。おそらく教育と知性を直結させること自体が歴史的にも間違っており、知性は教育が及ばないところで密かに育まれるものだろう。したがって、学校教育での高学歴エリートというものが高度な知性とは無関係であるなら、彼らは学校教育を受容する従順さの度合いが大きかった者たちといえるかもしれない。この従順さの大きさがオウムの反知性主義を受容するのに不可欠とされていたと考えられる。

《かように多くの領域で、反知性主義がアメリカ国民に浸透してきたのは、まさにそれが、この国の民主的制度や平等主義的感情に根差しているからである。知識人にとってはつらい状況だが、その状況を正しく批判し克服するには、まさに鍛え上げた知性の力に頼るしかないだろう》と、評者は《批判的機能をはたす知識人》の役割を示唆する。反知性主義によって支えられたアメリカの《民主的制度や平等主義的感情》は、知性によって支えられる《民主的制度や平等主義的感情》の困難さの盲点を衝いているとしても、同時に金儲けによる不平等主義を大きく露呈させていることも間違いない。要するに、知性重視がもたらす不平等主義を避けただけのことであり、このことはオウムにも当てはまる。知性の度合いによる階梯を避けた代わりに、《修行の到達度によって上の位にあがるシステム》をうまく用意したのである。

ブッシュのアメリカであれ、オウムであれ、反知性主義の行きつく先は戦争であり、殺人行為にほかならない。反知性主義はけっして知性の乗り超えを意味してはおらず、むしろ知性の退行であって、無知、粗野、頹廢を内包した蛮勇がそこではもてはやされる。静謐^{せいひつ}な理性は退けられて、物ごとのすべてが善か悪か、正か邪か、味方が敵かに二分割され、悪に映しだされた善を見ず、正と邪がつながっていることを考えず、味方と敵が不確定に揺らいでいる場所へと降りて行こうとせず、すべての決着が浅瀬で図られることを常に願っている。反知性主義は知性を憎むだけではない。人が知性的であろうとすることを憎むことによって、知性的である人を憎むようになり、その憎悪は自分たちの理解を絶するものへの敬意をもってではなく、敵意をもって対峙しようとする。敵意を支えているのは恐怖であり、恐怖をもたらす淵源は除去することによってしか解消しえないと考えられているから、その解消の仕方が手荒い破壊、滅却として訪れることになるのは避けがたい。

オウムについての発言の中で最も信頼が置け、耳を深く傾けたいと思っている、その少数者の一人である映像作家の森達也の文章が、植島啓司の文章の隣の紙面に並んでいる。

《教団の内側に視点を移して撮影した自作のドキュメンタリー映画「A2」の中に、こんな場面がある。松本サリン事件の被害者である河野義行さん宅に、事件にはかかわっていないオウム幹部が謝罪に出向く。カメラの前にさらけ出されたのは、謝罪の仕方が分からない幹部の姿だ。

多くの人に、その程度の反省しか持ち合わせていないと解釈された場面だった。でも僕が描きたかったことは少し違う。確かにお粗末ではあるけれど、そこに提示される信者の実相は、世間一般が想定する邪悪さや凶暴さとは異なり、一途に信仰を選択した結果の不器用さと浮世離れた。

同時に、サリンを散布した理由が本当にわからないうちは、彼らも謝罪にリアリティーを持ってないという現実だ。加害者としての意識が薄い、とこれを責めることはたやすい。でも信仰に派生する視野^{きょうさく}狭窄と当事者であるがゆえに気づかない点を、ある程度は認めねばならないと僕は考える。》

映画『A2』を観た者として、私にもあのオウム幹部の、謝罪しに河野さん宅を訪れた筈であるのに、河野さんの前では謝罪になりえていない、彼ら自身困惑している奇妙な場面が印象深く、くっきりと脳裡に残っている。森氏がいうように、彼らが《謝罪にリアリティーを持ってないという現実》の中に立っていることは間違いない。彼らはオウムの上層部がサリンを散布しただろうことを否定して、教団に残っているのではなく、散布の事実をほゞ認めた上で教団に残っていることが謝罪へのスタンスを不明確にしていた。それは、オウムがサリン事件を惹き起こすような教団であることを知りながらも、オウムに居場所を求めようとする若者たちが絶えない、という「事件後入信」の現象と結びついている。「事件後入信」や事件後の残留はなにを物語っているかといえ、映画の中で好青年の雰囲気漂わせている魅力的な信者が、尊師がサリンを撒けといったら、どうすると森氏が訊いたとき、「宗教の危険性は承知している」と付け加えながら、撒くとためらうことなく答えた場面に象徴されている問題が、《謝罪の仕方》を重たく覆っていたのである。

オウム幹部が《謝罪にリアリティーを持ってない》のは、《サリンを散布した理由が本当にわからない》からではなく、《本当にわからな》くても、尊師に命じられれば自分も撒くかもしれない、いや、少なくとも、その命令を拒否するだけの理由は自分の中に見出せないということであったらと思うられる。森氏はおそらくそういおうとした筈だ。つまり、彼らは「謝罪」の条件を欠いたまま、「謝罪」の気持をあらわそうとしたために、何とも奇妙な場面に放り込まれることになったのであって、単に一般社会の作法にあまりにも疎くなっていたからではないことは確かである。サリンの散布を明確に拒否することは教団と訣別することであり、そのときに初めて「謝罪」を心から口にすることができるのであれば、オウムに残りつづけていること自体が「謝罪」にとって矛盾にほかならなかつた。謝罪をしようと思っても、自分たちが謝罪する場所にはいないと

いうことの前で立ち尽くしていた、ということが重要であったにちがいない。

《社会の側も、事件の動機がいまだによくわからない。加害側も被害側も動機や理由が不明であれば、何も進展しない。本気で再発防止を考えるのなら、かつての教祖が何を考えて何をしようとしていたのかを明らかにしなければならない。

しかし松本被告の裁判にその姿勢はない。弁護団や検察側だけに非があるのではなく、「一刻も早く彼を吊^{つる}してしまえ」とする世相にその原因がある。》

「謝罪」の前で紛れもなくオウム幹部は立ち尽くしていたが、社会の側もほとんど気づかぬままオウム事件の前に立ち尽くしていたのである。どうしてオウムのような事件が起こったのか、どうして事件後に信者は教団を離れず、「事件後入信」は続くのか、といった問いに真正面から向き合うなら、少数とはいえ、オウムに居場所を求める若者たちの跡が絶たないような社会は、彼らにとってどのような生きづらい社会であるのか、という問いとして跳ね返ってくる。どう考えても、社会がオウムを産み落としたのであって、オウムが社会を産み落としたわけではないからだ。このことは、社会はオウムのかたちをとって反社会的な要素をかかえこんでいることを物語っている。オウムのような事件が起きたとき、教祖や信者たちに憎悪を募らせ、徹底的に彼らを排除しようとする社会のあり方そのものが、オウムのような教団を発生させ、サリン事件のような想像を絶する事件を頻発させる淵源になっているということなのだ。

《信者たちのほとんどは善良で純朴だと僕は確信している。東京拘置所で接見した幹部信者も同様だった。この純朴さが残虐行為へと転換するメカニズムを、洗脳やマインドコントロールなどの安易であいまいな言葉を使うことを拒絶しながら、ぼくらはもっと必死に思考せねばならない。それは、オウムだけに突出する現象ではないからだ。

オウム事件以降、他者への寛容さを失った日本は、そのまま9・11以降の米国に重複し、パナウェーブで狂奔しながら拉致問題で憎悪と排斥感情をむきだしにする現在へと直結する。

オウムによって喚起された過剰な危機管理意識は、仮想的を見つけて先制攻撃を繰り返しながら、充足することなく更に肥大する。

主語が「私」という単数から「我々」という複数に変わるとき、善意や正義は憎悪や攻撃性に容易に転換する。オウムもアルカイダも米国も、すべて構造は同様だ。》

信者たちが凶暴で残酷な性格の持ち主であったから、凄惨な事件が惹き起こされたわけではないことは、森監督撮影の映画『A』や『A2』を観ただけでも歴然とする。彼らの善良さや純朴さが社会の中で生きていくことが耐えがなくなるほどの善良さや純朴さであることは、スクリーンを通してしみじみとこちらに伝わってくる。この社会で生きていくのに障害となるような善良さ、純朴さであったが故に、彼らのような若者が少なくとも疎まれたり、邪険にされないような居場所を求めた結果、オウムに行き着いたのである。オウムとは単に宗教組織であったわけではなく、若者たちにとってはその前

に生活共同体であったと考えられる。事件後信者たちが教団から去らなかったのは、オウムが生活共同体としての大きな側面を持っていたからであり、「事件後入信」が続いたのも、若者たちは宗教組織としてのオウムではなく、生活共同体としてのオウムに救いを求めていたからではなかったか、と推測される。

《「この世の救済のためには悪事さえしなければならない」という松本被告のメッセージは、きまじめな人ほど強く響いた》と植島啓司は書いていたが、このメッセージが魅力的に響くのは、この世を救済するためには、この世のあらゆる悪事を一掃するほどの大それた悪事をもってなされなければならない、という意味が張り付いているからである。もちろん、その大それた悪事はこの世の救済と直結しているから、本来的には悪事は善事であって悪事ではない。ここで同じこの世の悪事であっても、救済のために（あえて）行われるべき悪事と、救済にもなんにも結びつかない悪事とに峻別される。いいかえると、救済のための悪事はやがて救済された 暁^{あかつき}には大いなる善事に転換されるが、それ以外の悪事は単なる悪事として堆積されていき、ますますこの世を悪化させ、墮落させていくだけである。もし信者たちがサリンを撒くという悪事をなすことによって、この世は救済されると信じ込んでいたなら、サリンを撒くことをためらうことのほうがおかしかったのだ。

サリンを撒けば多少の犠牲者が出ることは彼らにも充分わかっていた。では、その犠牲者にとってこの世の救済とはなんであり、はたして救済は犠牲者にも届くのだろうか。サリンを撒くという悪事に手を染める自分たちがこの世の救済によって栄光に包まれるなら、犠牲者が同様に栄光に包まれないということがどうしてありえよう。この世を救済するためには当然ながら、サリンを撒く者が登場しなければならないし、同じくその犠牲者も登場しなければならない。それぞれの役割が総合されてこの世の救済が成就されていく、という考えがそこには一本太く貫かれている。しかし、サリンを撒く者には救済のための悪事であることが納得されていたが、犠牲者にはそんなことは納得されないまま被害に遭遇するという決定的な差異が生じていた。その差異はどのようにして跨ぎ越すのか。納得しているかしていないかは、ただ意識的か無意識的か程度の人間界での取るに足らない差異にすぎず、この世の救済という大偉業の成就に連なったかどうかだけがなにごとかであるのだ、という論理が差異の上に覆い被されたのではないだろうか。

すべては信じるか信じないか、であった。「この世の救済のためには悪事さえしなければならない」という教祖のメッセージを信じなければ、教団の外へ去るしかなかった。サリンなどを撒いてこの世の救済が成就されるなんてありうる筈がないではないか、という疑問が一瞬でも脳裡をかすめさるなら、その者は退去しなくてはならなかった。教団の外にいる人間は教祖のメッセージを信じなかったから、またサリンなどを撒いても救済される筈がないと思っていたから、教団の外にあったわけではない。いくら社会に不平不満が募ってこようとも、社会の中に小さな居場所を持ち、その居場所が発してい

る、それほど強力ではない磁力にたえず引き止められていることが、大多数の者を教団の外に立たせているのである。社会の外へ出るようにして教団の内に入った者も、教祖のメッセージに惹かれたからではなく、社会の中に居場所を持たない生きづらさが社会の外にある教団の内へ誘ったといえる。

社会の外へ飛び出た者は社会の外に居場所を見出して、そこで生きていくより仕方がなかった。その居場所がオウムであったなら、オウムでいかにして生きていくかが彼らの生の課題であって、オウムで生きていけなければ、彼らはこの世のどこにも生きる場所は見出せなかった。社会の外へ飛び出した信者にとって、オウムは自分たちが生きる最後の拠点として思い定められていたと推測される。このとき彼らはオウムの価値観、倫理に即して生きることを選択し、決断したにちがいない。社会の価値観、倫理から放逐された彼らには、もはやオウムの価値観、倫理の中で生きる以外にどんな術もなかったということだ。こう考えるなら、信者は社会の外へ飛び出してオウムを選び取った時点で、すでにオウムを信じざるをえなくなっていたのであって、社会よりもオウムのほうが信じるに足るからオウムを信じるに至ったわけではないということがわかる。

信じるか信じないかの前に立たされていたのは、オウムの信者たちばかりではない。社会の中で呼吸している（ようにみえる）我々ですら、信じるか信じないかの前に立たされていることには変わりはない。我々が社会の中で呼吸できているのは社会を信じているからであって、社会を信じられなくなったとき、我々はたちまち呼吸できなくなる。もちろん、我々は社会を信じているとたえず自分自身に言い聞かせながら、生きているわけではない。そうする必要がないほどに我々は社会を無意識のうちに信じているというよりも、社会を無意識のうちに信じ込まされている。したがって、社会の中で生きている我々だって、リストラされた上に家族離散に追い込まれたり、更に新たな不運がその上に積み重なってくることになれば、社会の悪意を感じ取らざるをえなくなるのは当然であり、そこにオウムのような受け皿が自分の目の前に現れてくれば、社会から飛び出てオウムに飛び込むことになるのは、それほど不思議でもないし、大袈裟なことでもない。

社会の中にいることが当たり前とと思っているから、我々は社会をあまり疑ったりはせず、空気のように信じ込んでいるけれども、社会の中にいられなくなった者たちが社会の外にあるオウムに対して、信じる気持を強く突出させるようになるのは当然だと思われる。社会を信じるか信じないかにかかわらず、社会は存続するが、社会の外にあるオウムのような集団は信者が信じなければ存続しえないからだ。このことは、オウムでは信者にとって生きることと信じることが全く折り重なっていることを意味する。オウムが信じられなくなったからといって、社会の外に一步飛び出してしまった彼らが社会の中に戻ることは、オウムを信じないこと以上に困難であったからだ。いうまでもなくオウムは宗教組織であるから、なによりも信じ込むことが当然の前提になっているとはいえ、若者たちがオウムを信じるか信じないかという以前に、社会の中で呼吸しえなく

なっている彼らにとって、宗教組織であるかないかにかかわらず、オウムを信じざるをえなくなる生存の条件に置かれていたという点に注目しなければならない。

植島啓司は、《社会と折り合いをつけるか、あるいは異端として社会の外に飛び出すか》のいずれかしか、カルトの辿る途はなく、《富士山麓のサティアンは、彼らが非常に不安定なところに立っていたことを象徴していた》と指し示す。もしオウムが社会の中に居場所を占めていたなら、社会の中で生きることによってオウムだけを信じることを突出させる必要もなかったし、だいいちそれは不可能なことであった。社会の中で存続するオウムは、社会の中で存続することを第一とする宗教原理を打ち出していたらうからだ。オウムが社会の外に飛び出したということは、彼らが自らを社会に優先する唯一の至上の世界とすることを物語っていた。実際は社会の中で存続させていく余地を見出すことができなかつただけであるにもかかわらず、社会の外へ飛び出すことによってオウムは自体を唯一の世界とすることなしには存続することはできなかったのだ。

オウムが自体を唯一の世界として信じることなしには存続できないというようにして、社会の外にあったなら、社会の外へ飛び出した若者は自分が生きるためにも、オウムを唯一の世界として存続させることを至上とするようになるのは不可避であった。というより、おそらく若者たちにとって、社会の外へ飛び出すことによってオウムに出会ったというかたちではなく、オウムに出会ってその中で生きようと決心したとき、社会の外へ飛び出してしまっていたというかたちを取っていただろうからだ。オウムがすでに社会の外に存続していたということが、すべての始まりであった。社会の中で呼吸困難に陥っている若者たちがオウムの中に入ることによって、容易に社会の外へ飛び出せることになったからだ。オウムの信者が増殖することによって、社会の外へと飛び出しているながらも、信者が生存し、教団が存続するために社会とのかかわりも多くなり、同時にその分、社会との接触によってしいられる不合理や矛盾も増殖していくことが避けられなかった。

社会との摩擦をいくらかでも解消するためにか、それとも選挙運動の体裁を取った布教活動のためか、判然としなかったが、麻原教祖らが90年総選挙に打って出て、問題にならない低得票数で落選したことがあった。この頃からオウムが変質し始めたことを指摘する声がジャーナリストや専門家たちの間から出たことがあったが、この選挙運動がオウムにとって非常に重要な意味を持っていたと思われるのは、いわば社会の外へ飛び出した世界から社会の内へ呼びかけるという体裁を取って、その声が社会の中にどこまで届くかという意味あいに貫かれていただろうからだ。もちろん、奇妙というか滑稽というか、教祖の仮面を被って歌いながらオウム踊りを披露する大道芸のような選挙運動は気味悪がられるか、面白がられるかの話題性しかなく、なによりも演説がサティアン内で信者に語りかける言葉そのものであったために、社会の中に浸透する力は全くなく、選挙結果が惨敗に終わるのは誰の目から見ても明らかだった。

有権者はオウムの選挙運動に全く関心を払わなかつただけであって、それ以上の他意はなかつたが、おそらく大衆的な宗教をある時期は目指したかもしれぬオウムにとって、有権者のあまりもの無関心ぶりは社会の中にいる人々へのオウムの無関心として返答されることになっただけでなく、社会の外と内との断絶は社会の外からの社会の内に対する怨念を掻き立たせることになったのは想像に難くない。もともとが自分たちが社会の外へ望んで飛び出して行ったというよりも、社会の中から放逐されたという被害者感情が蟠^{わたかま}っていなくはなかつたろうから、オウムの選挙運動に対する社会のあまりもの無関心ぶりは社会からの冷淡な仕打ちとして、社会に対するオウムの怨念に油を注ぐ結果になったと充分推測される。

オウムも信者も社会の外へ飛び出していった者たちであったから、社会がオウムに関心を全く払わなかつたように、オウムのほうも社会に関心を全く払わなければ、その後の事件などは起こることはなかつた。もちろん、社会の外にありながら社会との交渉を断つことはできなかつたから、出家信者と家族間のトラブルなどが絶え間なかつたとしても、それは新興宗教に付きものの揉めごとであって、上手に対処すれば事件に発展するほどの問題ではなかつた。ところが、処世ではどうにも収まりそうにない教義をオウムが孕んでいるところに大きな問題があった。その大きな問題は、「この世の救済のためには悪事さえしななければならない」というメッセージに集約されていたとみなせる。つまり、オウムが「この世の救済」を考えているところに最大の問題点があった。

いうまでもないことだが、社会の外へと飛び出したオウムはこの世の外へと飛び出したわけではなかつた。この世の中にとどまって、「この世の救済」についていろいろと考えていたのである。社会の内も外もこの世に属していたから、「この世の救済」を唱えるオウムからすれば、その「救済」は社会そのものを変えないことには不可能であった。社会そのものを変えるためには「悪事さえしななければならない」が、社会の中の「悪事」は社会の枠組みを超えるこの世では「救済」としての善事になるということであった。こんな理屈が成り立つのだろうか。社会の外へ飛び出すことなど考えられず、社会の中に生きることとこの世に生きることが同じである我々からすれば、悪事は悪事であって、悪事が「この世の救済」に役立つだろう筈がなかつた。ところが、社会の外に生きる世界を見出しているオウムにとって、社会の幅よりも大きいこの世は社会の価値観では捉えきれない価値観で成り立っていたから、社会の価値観で測られる悪事はこの世の価値観では「この世の救済のため」の善事とみなされるものであったのだ。

「この世の救済のためには悪事さえしななければならない」というメッセージは、「この世の救済のため」の善事は、社会の中では必ず悪事として現れるという逆転した意味を含んでいたと思われる。このメッセージの虚偽は、社会の中で行われているすべての悪事が「この世の救済のため」の善事に直結しているか、という疑問に対して、オウムが行う悪事だけが「この世の救済のため」の善事に直結しているとたぶん答えるところに、

そして社会の中では同じ悪事として現れる、オウムの悪事と他の悪事とをどのように区別することができ、その区別を一体誰が判断するのかと問い詰めていくなら、社会の中で悪事を行うオウム自身が「この世の救済のため」の善事と判断しているにすぎない、というところにあった。当然ながら、オウムの悪事に巻き込まれた犠牲者や関係者にとって、事態は「この世の救済」などとは結びつきもしない、単なる悲惨さだけが満ちあふれていることにも一切答えられないところにあった。

「この世の救済のためには悪事さえしなければならぬ」というメッセージに、社会の中に生きる我々は心を動かされることはない。妄想として斥けることができる。それはなにも我々がこのメッセージに向き合って、とことん考え詰めた挙句、その虚偽に気づいたからではない。まず最初に我々は、「この世の救済」などを考えたりはしないとすることに困っている。更に我々は、社会を変える必要はあると思っけていても、社会の救済という発想にも立つことはない。要するに、そのメッセージを妄想として斥ける我々は、その妄想性に気づいたからではなく、そんなメッセージが発されてくる場所を我々の生きている社会は持っていないが故の遠い違和感によって、単に皮膚感覚として妄想性を察知しているだけのことなのだ。

社会の大きさとこの世の大きさが一致している思い込んでいる我々にとって、社会から去るときはこの世から去るときである。だから、この世はいつも社会とダブって我々の思念の中に現れる。しかし、社会の外へと飛び出しているオウムにとって、この世はもろに直面している世界である。この世のことは考えていても、社会のことは全く念頭にない。したがって、社会の価値観に縛られることはない。信者にとって肝心なことは、この世で生きるオウムの価値観に即して日々を生きることである。それ以上の大事なことはない。社会の中をこちら側の世界とみるなら、信者はあちら側の世界の住人である。当然、こちら側の価値観はあちら側に通用しないし、あちら側の価値観もこちら側に通用しない。このことは、こちら側の悪事は必ずしもあちら側では悪事とみなされないことを意味する。更に、あちら側の人間がこちら側でそうみなされている悪事を行うことは、あちら側の世界にとっては悪事ではなく、善事とみなされることもありうるということをも意味する。

もう一つ、この上に次の考えを付け加えてみる。社会とはいってもなく人為的なものである。その社会の外へ飛び出すということは、人間の社会の外へ飛び出すということである。社会の中の人々は金儲けや脚光を浴びることや安楽に暮らすことばかりを考えて生きているが、そんな社会の外へ飛び出して生きる信者たちが、「この世の救済」のことばかりを考えて一心不乱に修行する自分たちの生活を、人間にとって本来の姿と考えるようになり、やがて自分たちこそがこの世を支配する神に最も近づきつつある存在とみなすことになっても、別に不思議ではない。そのとき、社会の中でコンプレックスを抱きながら生きてきた彼らはいまや逆転して、社会の中で生きる人々よりもオウム

の中で生きる自分たちのほうが、上位の生き方を目指しているという思い込みを育むようになっていく。

社会を見下ろし、社会の中に拘束されないオウムの価値観に即してひたすら真面目に修行に励んでいる信者たちにとって、「この世の救済のため」だけを願って自分たちが手にした、社会の中でそういわれている毒物が単なる毒物である筈がなかった。「この世の救済のため」に必要とされているならば、毒物は単なる毒物ではありえなかった。ここで「良薬は口に苦し」という諺が思い浮かぶが、結局のところ、「目的のためには手段を選ばず」という方法に行き着く。森達也がいうように、《オウムもアルカイダも米国も、すべて構造は同様だ。》目的によって手段は正当化されないのである。目的の崇高さを手段の汚濁が裏切っているのだ。手段のプロセスの中に目的の崇高さが見出されなければ、手段の汚濁を隠蔽するために目的の崇高さが持ち出されているだけだといってよい。つまり、理念や目的が崇高であればあるほど、行っていることは必ず汚濁にまみれているものなのだ。

毒物は社会の中でも外でも毒物であり、その毒物を手にする者が社会の中の人間であるなら毒物であるが、オウムなら毒物でなくなるということは絶対に起こりえない。だいたい、「この世の救済」とは一体誰を救済することなのか。自分たちオウムの救済のことか。社会の中に生きている人々を救済することが本道ではないのか。社会の内とか外とかいっても、所詮人間の作りごとにすぎない。社会の外へ飛び出したといっても、人間の外へ飛び出したわけではない。にもかかわらず、オウムはあたかも人間の外へ飛び出したかのように思い込み、人間として《もっと必死に思考せねばならない》状態からも飛び出して行ったのだ。

《信者たちのほとんどは善良で純朴だ》ということは、思考の弱さにおいて《善良で純朴だ》ということにすぎない。《この純朴さが残虐行為へと転換するメカニズム》こそを、もっと思考せよ、と森達也は訴えるが、思考の強さに裏付けられない純朴さはそもそも残虐行為の別名と考えたほうがいいのではないか。善良と純朴が込みになって愚かさにも包まれているから、純朴であればあるほど愚かになっていき、残虐行為が喚び込まれていく。信者の善良と純朴が社会の外へ飛び出していくことになるのは、社会の中にそれらの居場所が見出せなくなっているからだ。つまり、社会が彼らの善良と純朴を受け入れるほどの善良も純朴も失ってきているからにほかならない。社会の中に彼らが自分たちの居場所を見出せるような社会にならないかぎり、いいかえると、彼らのような善良で純朴な存在が社会の外へ飛び出していかざるをえないかぎり、愚かさは増幅されて社会の中へ逆流していくことになるのは今後も避けがたい。人間の社会というものは、弱者や異質者を排除することによって自らの治安を維持しようとするものであるよりも、さまざまな人間をたくましく育て上げていく多様性の強度において治安を保っていくものではないのか。

2004年3月7日記

